

目次

まえがき

第一篇 蘭語学の日本語研究に及ぼした影響

第一章 国語学と蘭語学との交渉

- はじめに(三) 時枝誠記と蘭語研究(三) 山田孝雄と蘭語研究(六) 中野柳圃とその学統(三) 柳圃、蘭語研究の展開(六) 吉雄俊蔵と蘭語研究(三三) 大槻玄幹と蘭語研究(二六) 鶴峯戊申と言語研究(三三)
- 『語学新書』の再検討(四三) 和洋折衷文典と品詞分類(四七)

第二章 稲村三伯と近代日本語の創始

——日本最初の蘭日辞典の訳編と訳語——

- 辞書の訳編と同学の士(五七) 三伯の青春と亀井南溟(六〇) 玄沢への入門と辞書訳編(六三) 『波留麻和解』と訳語(六六) 翻訳語と近代志向(六六) 海上随鷗と京都蘭学(七〇) 『社盟録』と三伯の思想(七四)

第三章 江戸時代蘭日対訳辞典の編集

- はじめに(七七) 日本最初の蘭日辞典(七九) 『ドゥーフ・ハルマ』の成立事情(八三) 日蘭文化交流の記念碑(八七) 蘭語対訳語彙集／辞典一覧(九三)

第四章 “ドゥーフ・ハルマ”の訳編と流伝

目次

問題の所在(九三) 『ドゥーフ・ハルマ』の書誌(九五) 初稿本の流伝(九六) 精撰本と刊本(一〇一)
『ドゥーフ・ハルマ』(写本)・刊本の若干の訳文比較(一〇六)

第五章 佐久間象山『増訂荷蘭語彙』の考察……………二二

叙・例言の考察(二二) 増訂の内容(二六) 象山と翻訳の内容(三三)

第六章 勝海舟の写本、『ドゥーフ・ハルマ』小考……………一三五

はじめに(一三三) 体裁・書誌・構成(一三五) 若干の問題点(一三九)

第七章 蘭学の家、田安家侍医、桂川家の人びと……………一四五

——桂川甫筑から上田敏まで——

問題の所在(一四三) もう一つの桂川家と『先祖書』(一五二) 系図と森嶋家(一五三) 森嶋小助・小吉と桂川家(一五九) 森嶋・桂川家の系図(一六五) 二代目桂川甫休(一六六) 田安家侍医、桂川家の歴代(一七〇) 田安家侍医、桂川家とその関係系図(一七四)

第八章 『遠西独度涅烏斯草木譜』の翻訳と出版の事情……………一七七

——日本最初の本格的ヨーロッパ博物学の導入——

はじめに(一七七) 松平定信と前田長庵(一八三) 大槻玄沢と吉田正恭(一八四) 本草学者、吉田正恭(一八七) 成立の事情と編集(一九一) 凡例の吟味(一九五) R・ドドネウスの伝(一九九) 総論と西洋本草学(二〇一) 生植各部ノ名称(二〇六) 新資料〈草木譜草案〉(二二三)

第九章 大槻玄沢に関する考察……………二二三

はじめに(二三三) 暁港漫録と玄澤(二三四) 蘭学階梯と蘭学梯航(二三六) 芝蘭堂と三又塾と玄澤(二四三) 玄澤と狂歌・戯文(二四六) 補記(二五〇) 『先考行實』(二五四) 大槻玄澤略年譜(二六三) 磐水、大槻玄澤家系(二七三)

第十章 勢州蘭学者、武部尚二の人と学問……………二七五

——『武部尚二雜記帳』などに関する一考察——

はじめに(二七五) 雑記帳の内容(二七六) A横文字系のもの(二七七) B日本語系のもの(二八二) C文法・語彙関係のもの(二八六)

第十一章 野村立栄『免帽降乗録』の考察……………二九五

はじめに(二九五) 吉雄耕牛とその関係者(二九六) 吉雄俊蔵の関係者(三〇一) 吉雄家の略系譜(三〇四) 江戸蘭学徒(三〇六) 蘭学者小解(三〇八)

第十二章 宇田川榕庵と蘭文法学習……………三一五

榕庵と蘭文典(三二五) 『属文錦囊』の伝流(三二六) 和歌による蘭文法(三三一) 日・蘭文型の比較考察(三三六)

第二篇 十八・九世紀、日本語研究とその方法……………三三三

第一章 新井白石と日本語研究……………三三五

はじめに(三三五) 白石の方法と『爾雅』(三三六) 日本語研究と白石の視点(三三九)

第二章 『東雅』の成立とその方法……………三四三

はじめに(三四三) 『東雅』の成立(三四四) 『東雅』の方法(三四七) 漢語と仮字遣い(三五〇)

第三章 江戸時代の翻訳論と翻訳法……………三六三

- はじめに(三六三) 国学者と翻訳論(三六四) 伴蒿蹊と訳文之条(三六七) 徂徠と翻訳論(三七〇) 漢語の構造と考察(三七七) 蘭学者と翻訳(三七〇) 翻訳と漢文訓読法(三六二) 翻訳の目的・意義(三六四) 翻訳の功罪(三六六)
- 第四章 江戸時代言語研究と術語法ダイミョクゴ……………三九一
- はじめに(三九一) 富士谷成章と術語法(三九三) 宣長と術語〈自他〉(三九六) 〈自他〉論と〈格〉論(四〇二)

第五章 近代学術用語集の訳編とその史的展望……………四〇九

- はじめに(四〇九) 蘭学と医術用語集(四二二) 江戸期の学術用語集(四二五) 明治期の学術用語集(四三三)

第六章 明治期、学術用語の訳定とその方法……………四三九

- 史的背景(四三九) 蘭学から英学へ(四四四) 植物学と翻訳用語集(四三六) 医学・薬物の訳語と用語集(四四四)
- 蘭学の伝統と新展開(四四九)

第七章 矢田堀鴻『英華学芸詞林』の〈挿訳〉に関する考察……………四七七

- 挿訳と傍訓(四五七) 挿訳の分類(四六〇) 同語異訳の問題(四六六) 『詞林』と訳語の性格(四六七) 使用言語の問題(四六九) 挿訳の比較語彙表(四七四) 挿訳の訳語と〈理學用語〉(四七七) 日・中訳語の比較と異同(四七九)
- 矢田堀鴻小伝(五二二)

翻刻・影印 資料篇……………五七七

- 『蘭語九品集』(五二九) 『蘭語首尾接詞考』(五三〇) / I『九品詞名目』(五三四) II『柳圃先生虚詞考』(五三〇)

索引

Ⅲ『四法諸時対訳』(五三三) IV『作文必用 訳書須知属文錦囊』(五九二)

- 書名索引(左二六五三)
- 人名索引(左二六四二)
- 事項索引(左二七六三)

文法用語一覧表(左五八九七)

あとがき……………五九五

挿画目次

- 『和蘭文語凡例』(五〇) 『語学新書』(五〇) 三伯の記念碑(鳥取市内)(七四) F・ハルマ(原本)の冒頭(八〇) D・ドゥーフ『日本回想録』(原本)、扉(八〇) 『和蘭辞書和解』(大阪本)の〈跋〉(八六) 『増訂荷蘭語彙』(二二) 田安家侍医、初代桂川甫休の『親類書』(一七) R・ドドネウス『遠西独度涅烏斯草木譜』(原本)本文第一ページ(三三) 蘭山先生肖像(三三) 大槻玄澤『蘭学階梯』(七四) 野村立米『免帽降乗録』・〈江戸蘭学徒〉(三六) 宇田川榕庵肖像(三三) 同墓(東京多摩墓地内)(三三) 白石肖像(四四) 『西洋紀聞』(自筆)(三四) 『倭名抄』(残篇)序、本文(享和本)(三六) 仙覚『万葉集註釈』(抄)〈発語〉(三三) 徂徠『訓訳示蒙』(三九〇) 吉田長淑『泰西熱病論』〈凡例〉(三〇) 成章『あゆひ抄』(四〇) 春庭『詞の通路』(四〇) 〈太西药名〉『訳鍵』(四六) 坪井塾『羅蘭漢日藥物名彙』(四六) 『英学芸辞書』(英学芸詞林)第二版(五二六) 中村正直『寄文』(五二六)

第一章 国語学と蘭語学との交渉

はじめに 蘭語学について、一部の人はかなり了解していても国語学者一般は、あいもかわらず、誤解を踏襲しているようである。これまでいくつかの著書や、論文によって蘭語学の資料、実態について公表してきたのであるが、この機にわたし自身、断定に近い私見として発表できる部分について、啓蒙的記述をのべたいと思う。下敷としてはかつて発表した〈国語学と蘭語学との交渉〉である。それを増補することによって論を進展させていく。

小著でも再三指摘しているが、大槻玄幹の著書に対するかぎりない誤解の根づよいことや、やはり長崎のオランダ通詞への偏見、いうならば、母屋と庇との関係がまことに疑しいことである。一つ一つのべたてる必要もないから割愛することとするが、また国語学や蘭語学に無知な学徒は、ある意味ではまったくの無防備であるから、これまで研究してきたものとしても、実証性のある学史の記述をすべきであると、責任を感じる。抛るべきはずの辞典の誤りを批判し、十分に調査した結果やふだんの自分自身による考究心が研究者に必要とされる。

1

時枝誠記と蘭語研究 以上は自戒の意味をふくめて日頃考えていた一端をのべたまでで、蘭語学関係の記述・考察で訂正しなければならぬ点は、まだ他に多く残されていると思われる。書名だけではなく、ことが内容に及ぶとなると決